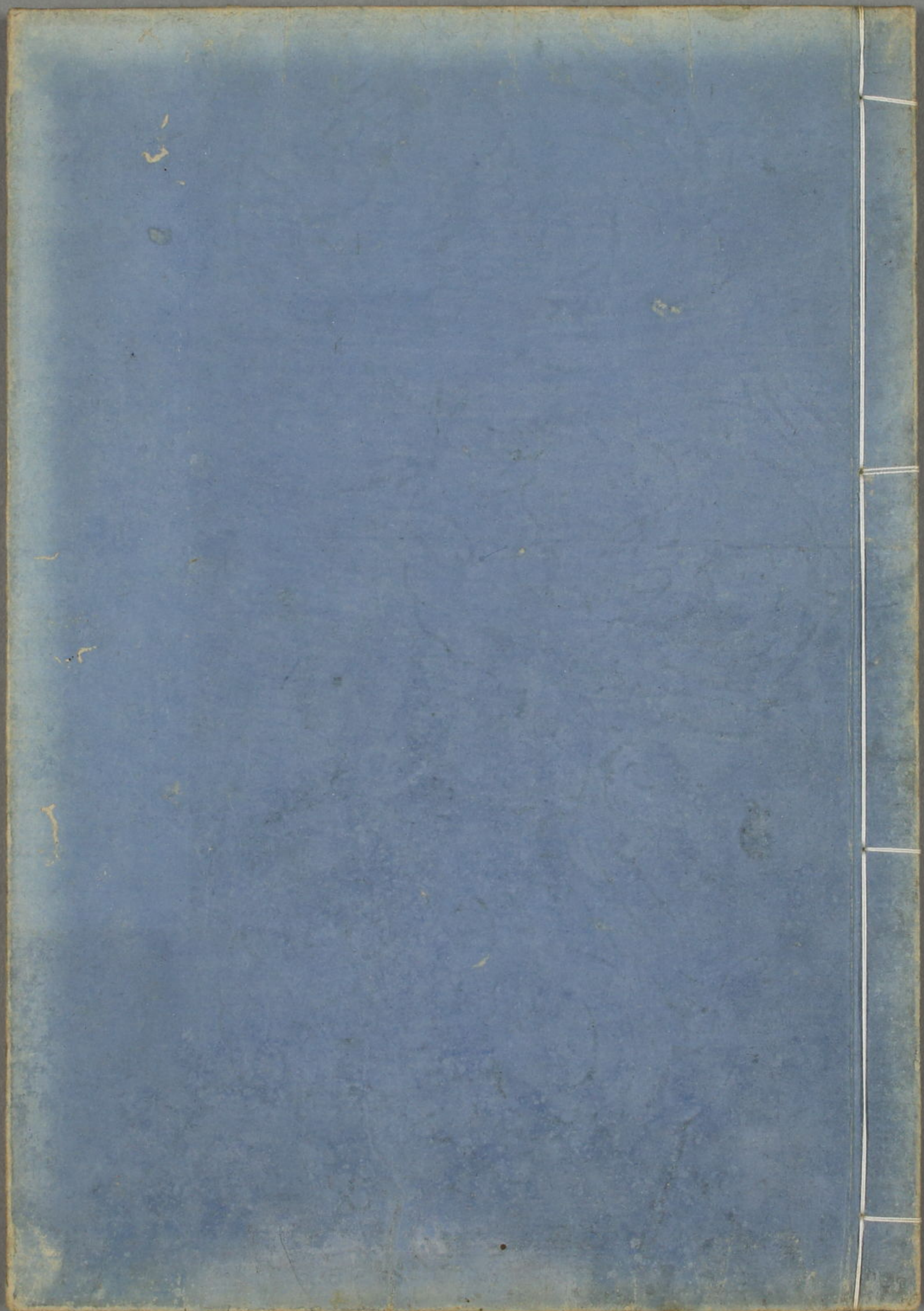
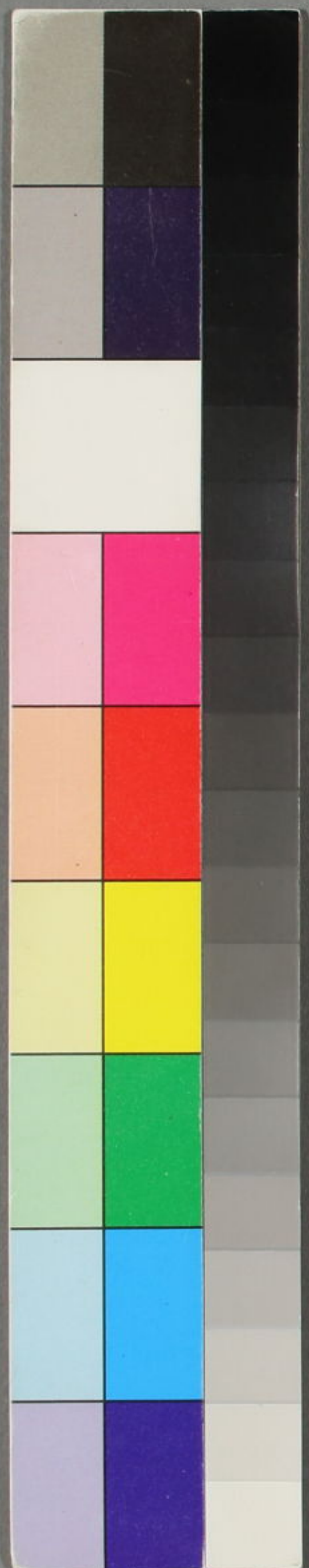




先進補像玉石雜誌卷第四

土岐十郎賴兼真影并傳

賴兼三条堀川館圖 十郎義人賴春

六間客殿 二間眠殿 葛葉店 衣家

四十八箇所の簞 簞乃屋 焼松料理

多治見次郎國長真像并傳

小笠原孫六泰長 目貫目釘 腹巻

廿四指たる服乃茂竹 十二束三ふせ

國長錦小路高倉館圖 古代酒坏 遊女乃圖

大判事中原章房朝長真容并傳

隠机 大判事 中原朝長 瀬尾兵衛七郎



雲居寺 承慶より一圖

土岐九近藏人頼春妻齋藤氏真影并傳

女房装束の圖 市女笠 板金剛 ひろ乃裏衣

舟本

大衆院尊圓法親王真影并傳

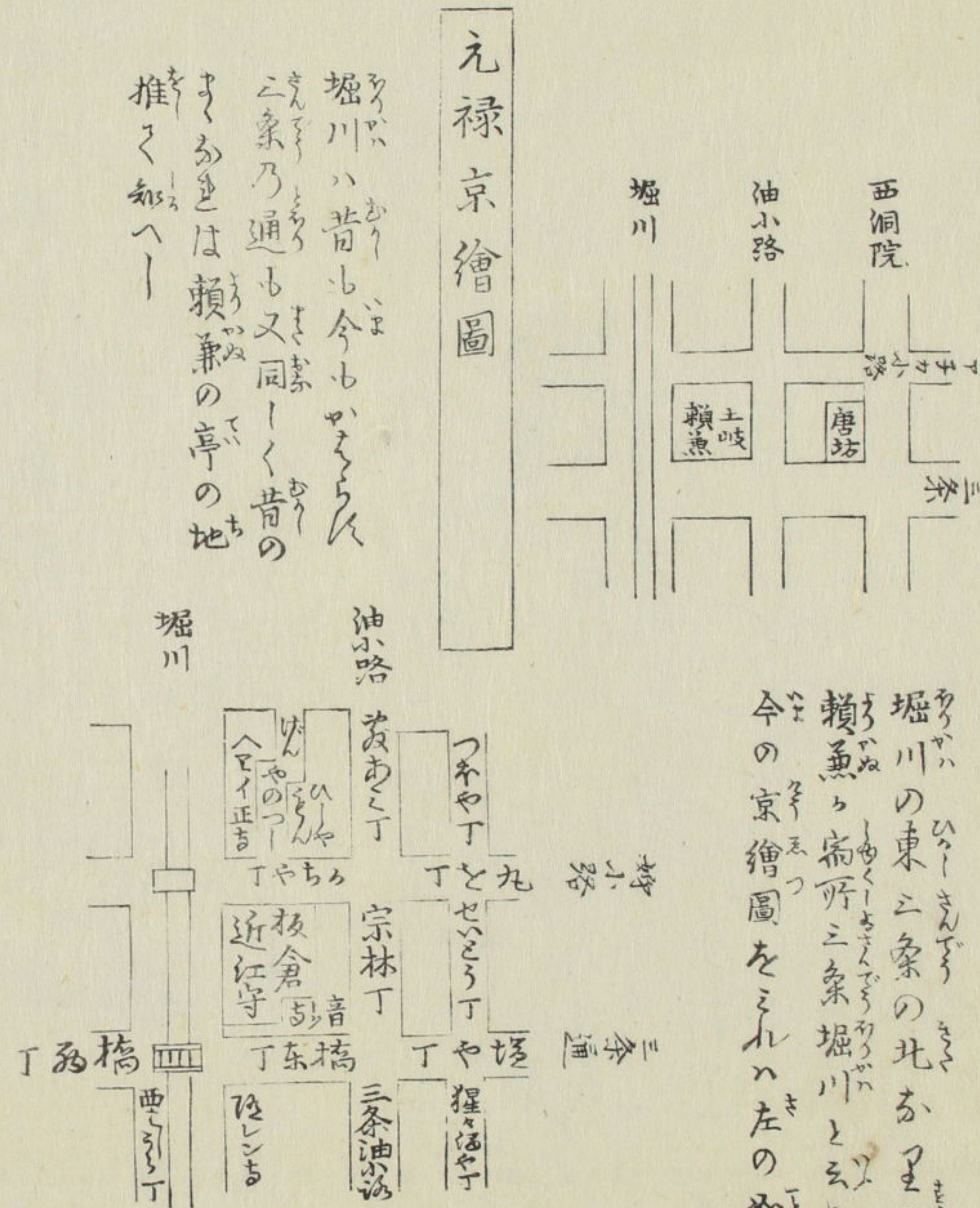
青蓮院 入本抄 世尊寺家 真蹟短冊

土岐十郎頼兼真影



應永寫本京繪圖所載土岐賴兼亭圖

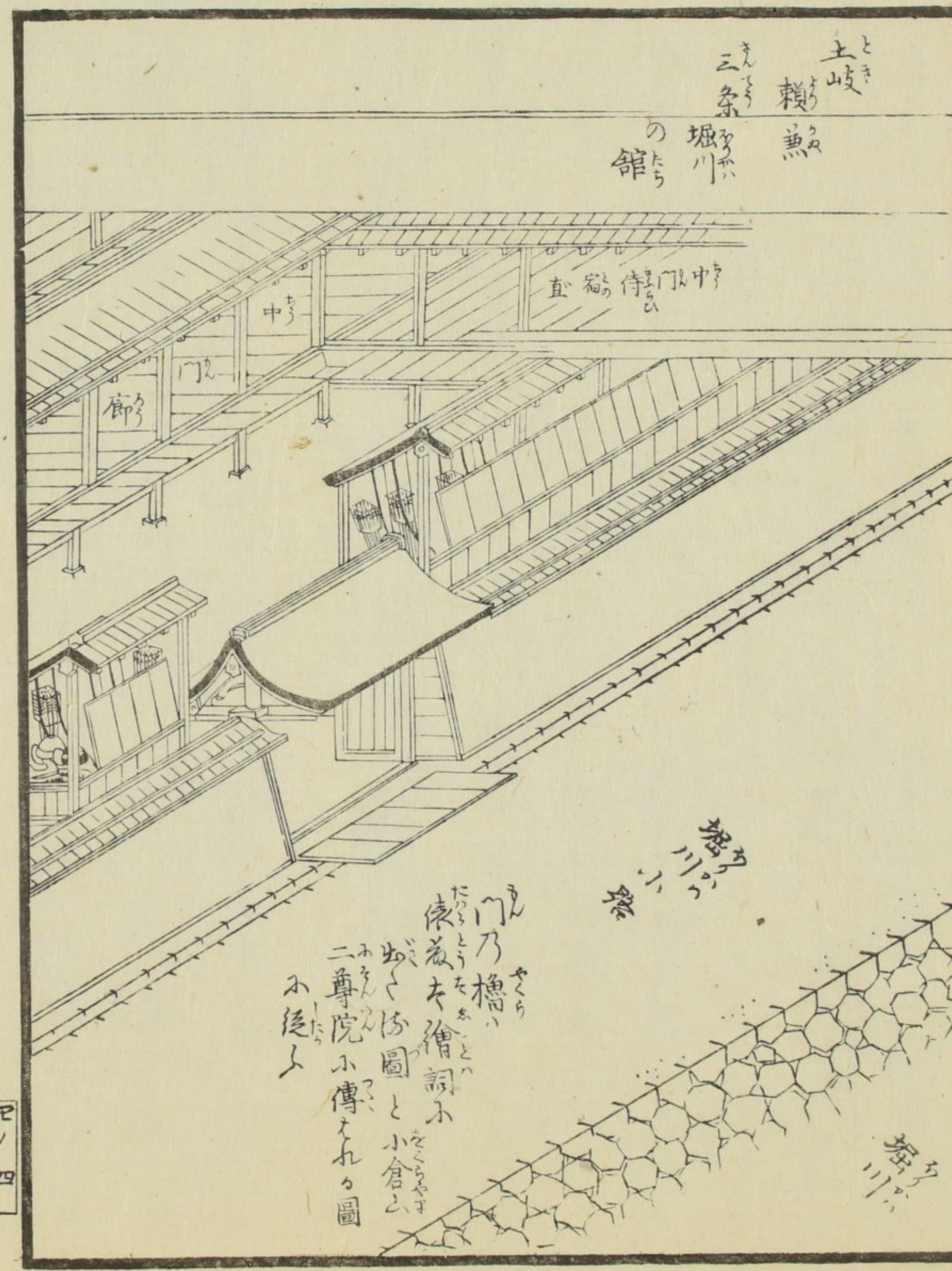
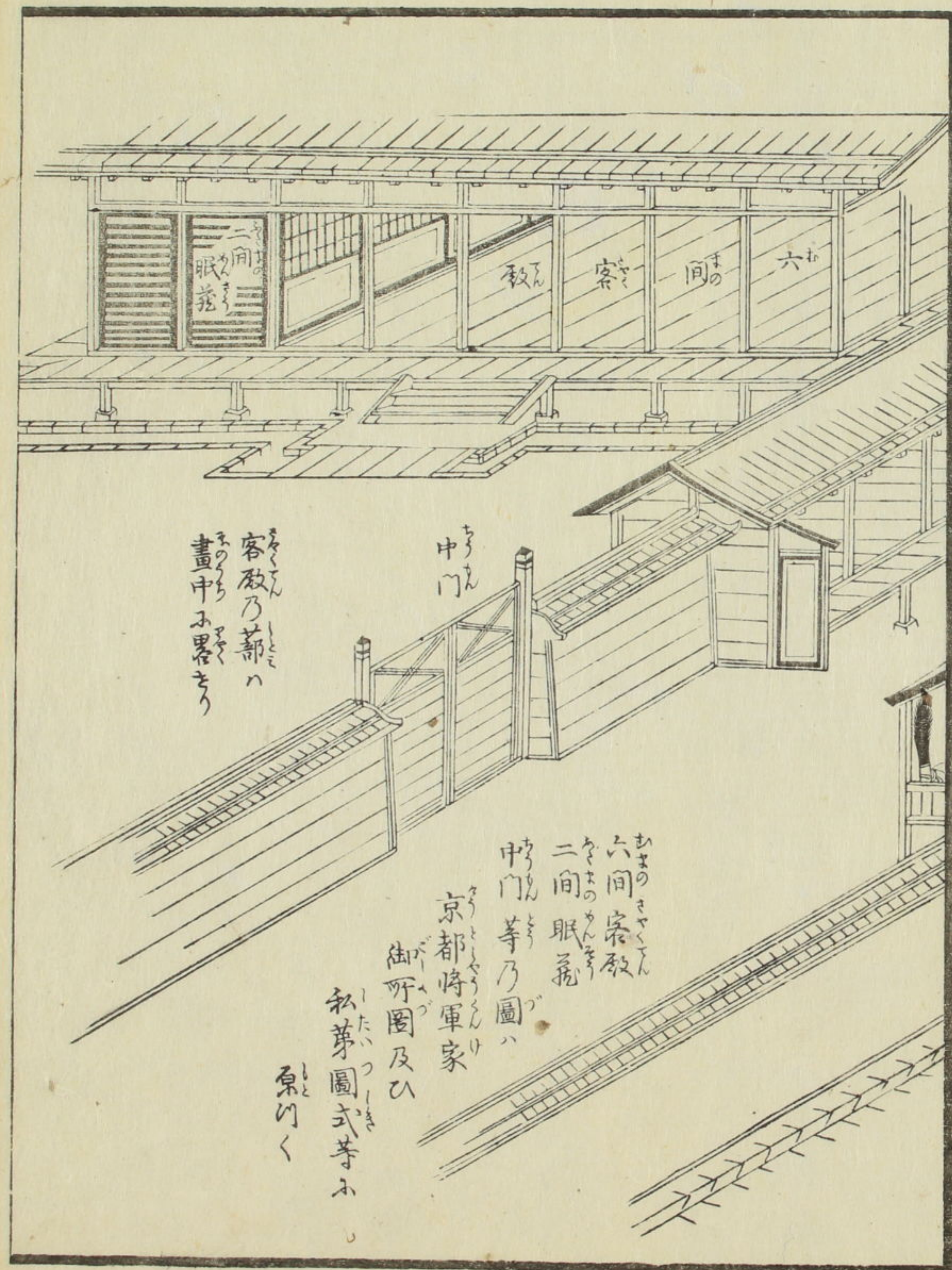
堀川の東三條の北から里即太平記
 賴兼の寓所三條堀川と云ふ所へ是
 今の京繪圖をこれに左の如し



土岐伯耆十郎賴兼ハ美濃國源氏ノ義濃守賴光朝臣
 乃嫡子義濃守賴國六男伊豆守國房八代乃孫小伯耆守
 賴貞乃十男小里伯耆守乃十男故後醍醐天皇ハ其時
 宮トヤ奉る頃より系上仕りしハより御位ト即を
 移し之を藏人トあさして御患々深きより上宿所ハ之
 系堀川より内裏御所ハ近くありけり是ハ常小昵近
 ありしけり正中元年後宇多院崩御の後皇太子邦良親
 王を廢して今上天皇乃之宮大塔を東宮小あり系ら
 せんと乃敵慮を相摸守高時障りより小よりさらハ
 言時一家を滅さるゝと思ひたり也一其謀速子漏
 ぐ後基資朝乃西郷閑東へ因りて給ひたり其後嘉暦元

年東宮親王薨御あり一かた一定三宮を東宮ふと推し
たももろろ一後伏見院第一皇子量仁親王光嚴院
と東宮とて同東頼崇一なり一かたは止あををひら
以高時入通中裔母後ちをら也加之當時入る父
貞時議らひし持明院教と大覺寺教と代り帝位
に即ち移り帝位也十年のちと中ふり也は程なく
讓位乃期近のちぬるを以てあそひ同東藏さるへそと
宸襟を惱まささ東頼兼等小仰合ささ也は頼兼の従弟
十郎義人頼春頼兼の父頼貞乃弟船本多治美四郎次郎
國長土岐頼貞乃伯父頼の孫足助次郎重範錦織判官
代後政以下大和河内美濃三河乃勇士宣旨ふ従ふもの

日くる馳加たるけ也はを六波羅乃常盤駿河守範貞
元亨元年より元徳元年迄六波羅の北方に任し中國乃成敗を司
る能く貞ハ北條義時乃三男陸奥守重時の子男常盤陸奥守
時茂の長子備前全津武藏守貞時中元年より元徳元年
の時範の長男義時の六男實泰の孫越後守顯時
の時義時の六男實泰の孫越後守顯時を討る一とく
を乃一とく形く用意ありけるに尤近藏人頼春儀
ふ替りしと元徳元年九月六波羅乃奉りしと我妻乃父
ありける妹を左郎左衛門尉利弘家ふゆきと此際の
上度を有乃より告たりける利弘大に驚き急ぎ六波
羅へ馳来り事乃子細をりけ也と範貞貞時相謀り
京中内外乃武士を六波羅へ召集くより召到をり付ら
せける是ハ也乃頃按津国葛葉と云ぬ乃地下人代官を

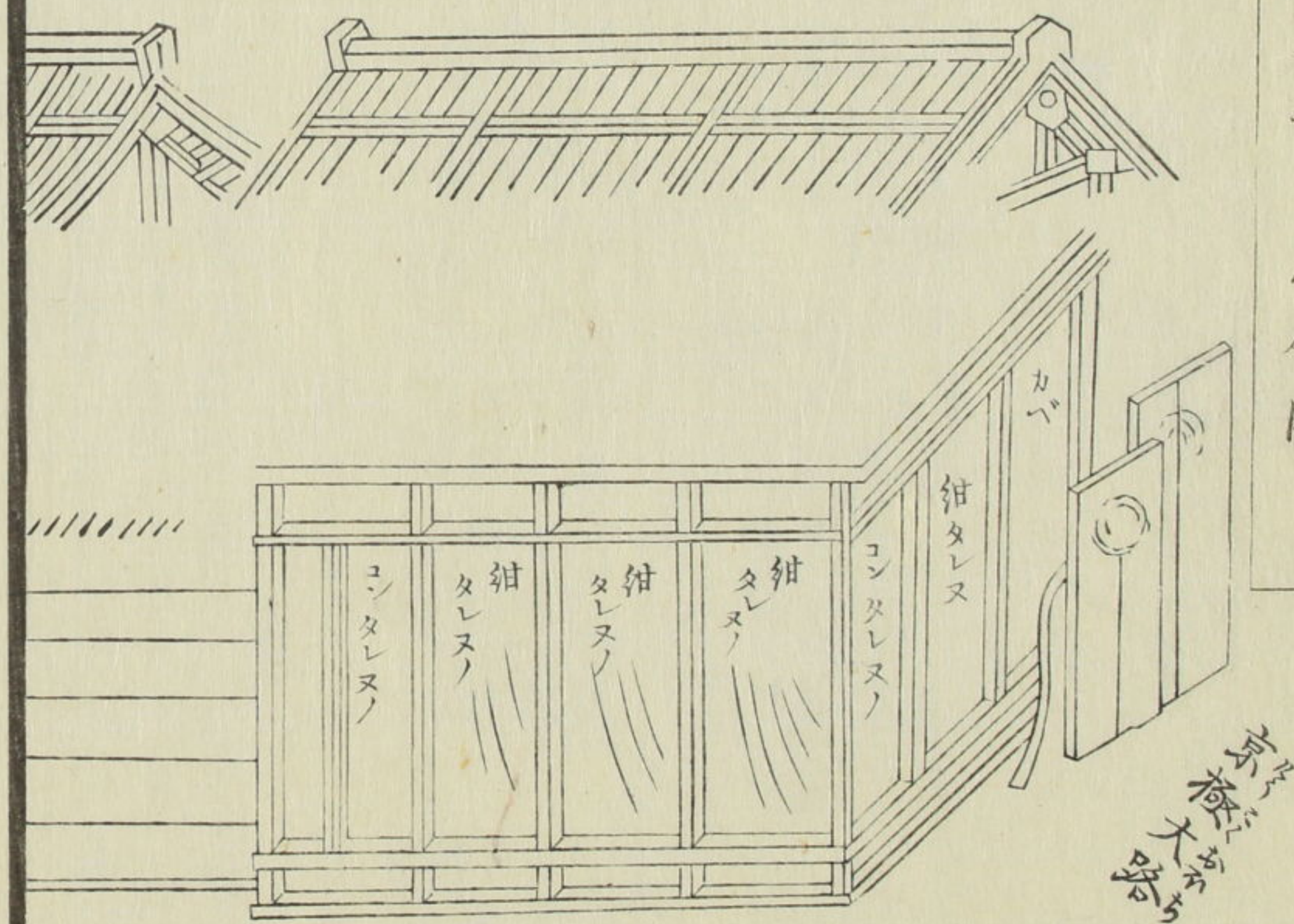


ハ態と敵を廣庭へ誘ひ出さし透間もあらずは虜らんと志
て并拂ふは退き受流し冬飛のそ人交りて以て殺れ
子後陣の二子餘騎二乃園より退く時を咄とそゆり
けふ頼兼光をなぐ久しく我々中へ生捕せんとや
思ひ々ん本乃寢所へ走り腹十文字を搦切て北枕
おぼやたどける中門に寝たる若黨等もひくち折
死し一人も遁る者なかりけり時綱も頼兼光首
をとりて鋒子貫き膝間を絶つて直ぐ六波羅へ馳
る頼兼光乃年三十五歳永仁三年子あり十郎太郎頼古
と云後了俊五位下に叙し源大夫と称せし乃子十郎次
郎頼孝藏人補一丸兵衛尉に任す

葛葉今冬河内國交野郡に属す即日年紀に継體天皇
元年春正月甲申天皇行至樟葉宮と云は處なり此
頃冬山門乃領所より總持坊より里代官を置たりそ
乃代官の家を本家と云後世本屋と云本所乃雜掌と
はもかきち總持坊乃雜掌を云地下人といハ葛葉乃
中乃百姓を云
に十八箇所乃篝といハ安居院大宮篝屋東澄ふ又系東
洞院篝者類大炊御門油小路五系京極篝等太平
也を云といとゆとに十八箇所定りからとといゆり
山城名勝嘉禎四年の奉書に為京中守護を請ふに
志す兄也
料松事以次濃國日野村伊豫國周後北系地以

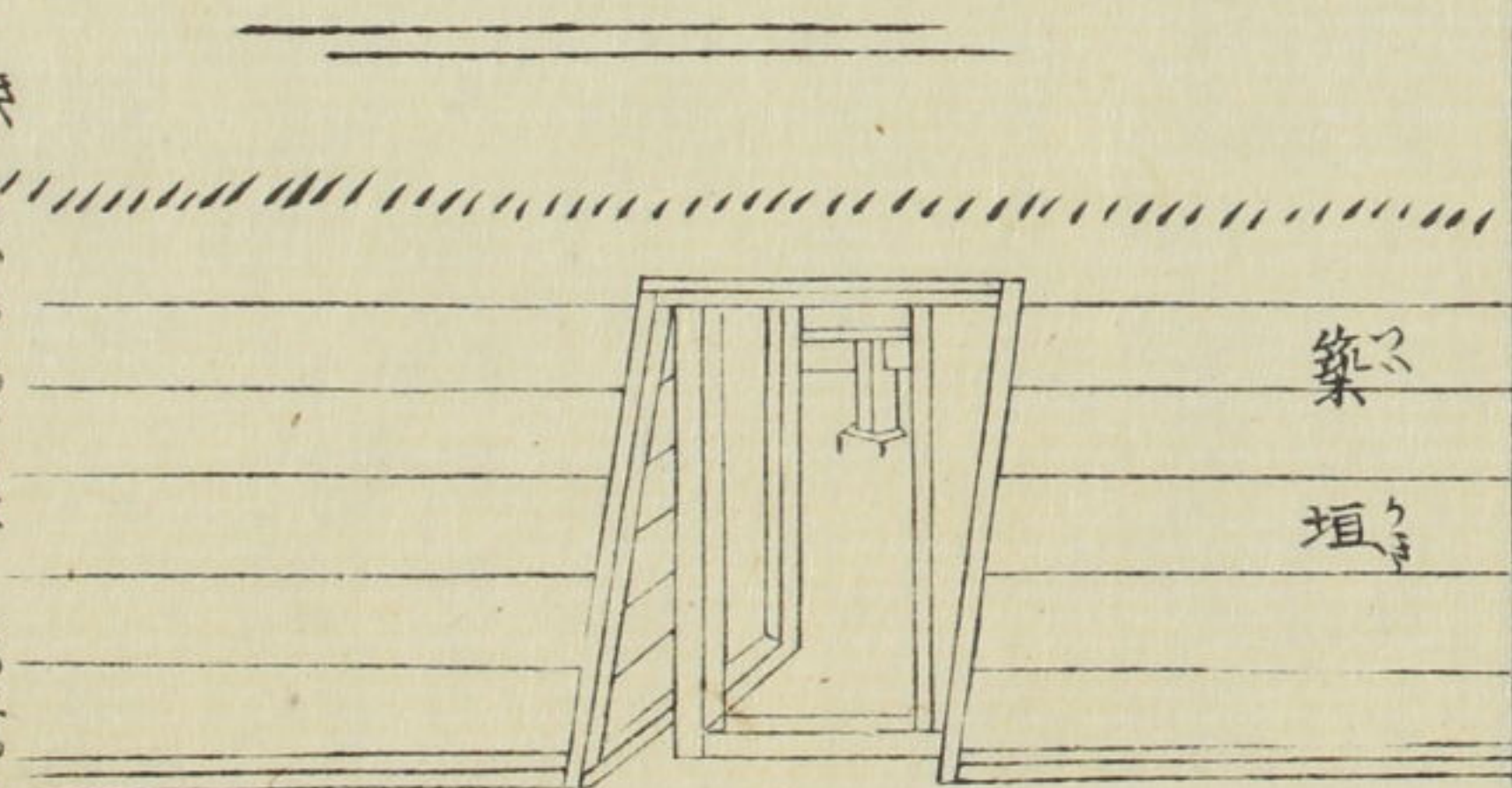
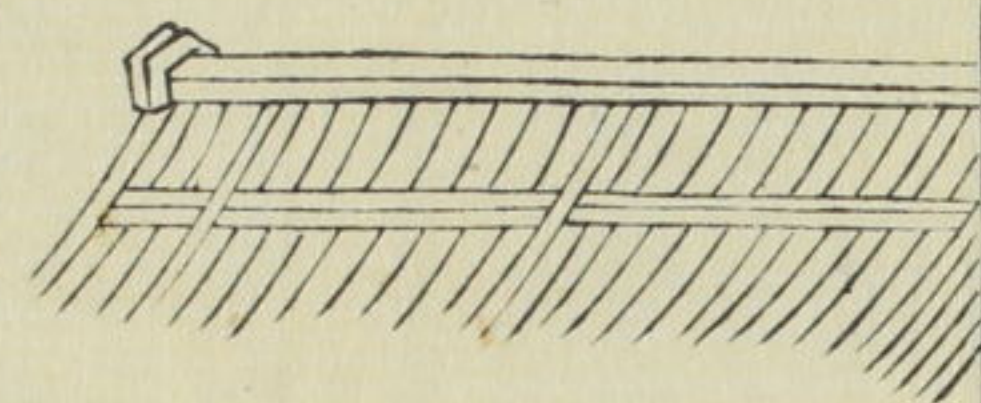
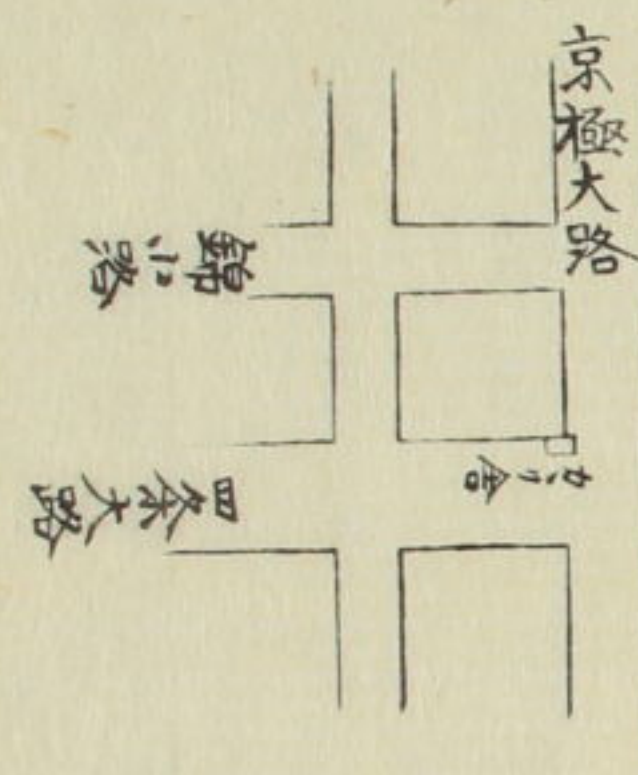
一遍上人繪詞所載なり乃舎圖

一遍上人繪詞の
西安元年八月廿
三日四伊法眼乃
繪おまのま加禪
四年より六十二
年のちふゝゝゝ
元徳元年より
三十一年前あり



目一 乃 大 入 秘

今案小四京極の
やと舎の所在なり



築垣

今乃辻番所
乃とゞろ
云へき形

建武二年記河原落書小代頭都ふるなるもの
町ふたの簀簾の荒涼五間板之板幕引きたし
役所と云其敷一うみ満たりと云一木小法量
み間様之間とあるはけ間ふり合へり

分内一所用途給貫文寄合多賀に多謝尉限
限毎年二改沙汰也不煩百姓也且聞東市云事并
護人使入部去一向可止之状依仰執事如件亦須
年六月廿日左京權大夫判修理權大夫判
入道殿とあり左京權大夫泰時修理權大夫時房二人
乃判たり將軍の前權大納言頼經卿たり又或記子曆
仁元年六月為洛中警務出過可掛簞中云定仍被
元僧紋於御家人等と見え不を合考也は元年不
より一と開拓東邊纂補不延應二年十一月廿二日
子為清左衛門尉奉行洛中未作簞屋等事可下
簞屋用途也假令八十所可下沙八十貫文由被定但

地頭分也不煩百姓煩之とあるを以て考へてハ
に十八箇所乃松園途凡に百八十貫文一々田地に
百八十所乃地頭分と知能一統らば義濃國日登村
伊豫國周茂北条の田地に百八十所ありと開拓
さく簞屋一遍上人繪詞に見えはあき兵士幾人
不守守と考ふ據あり
土岐頼兼傳賛不兼人乃勇を以て密付乃重を受不幸
あしと仇み死を去るも二人しかく死を守るを
を虧以國家不負と云へとあり今も太平記を
讀み十郎頼兼乃敗れたるハ左近藏人頼春乃癡情不
起るとい論ありと云と頼兼も自敗をとり

處あり其説をあらう云々一山本時綱小門より入る
 中門より上り客教了へく眠るの障子を閉くとり入を
 中門より築垣乃門を守教者も在会さかと思ひ候や
 中門乃宿直言いひきこく時綱より廊上上客教子
 ときむをあらう所かは何や思ひ頼兼身乃勇を怯
 警衛乃備等用かふと辨をきく嗚呼おきか哀
 志きか頼兼をく防禦る心を用ひしめは時綱至
 ると中門を啓くしむる何といふ中門乃兵士
 も皆勇あり節あり然しくたぐ秋曉残夢を甘んしく
 蟬螂を伺ふる殺氣をあらう又百年乃後らむを
 なく無限乃憾を遺さしむると云へ

多治見四郎次郎國長真像



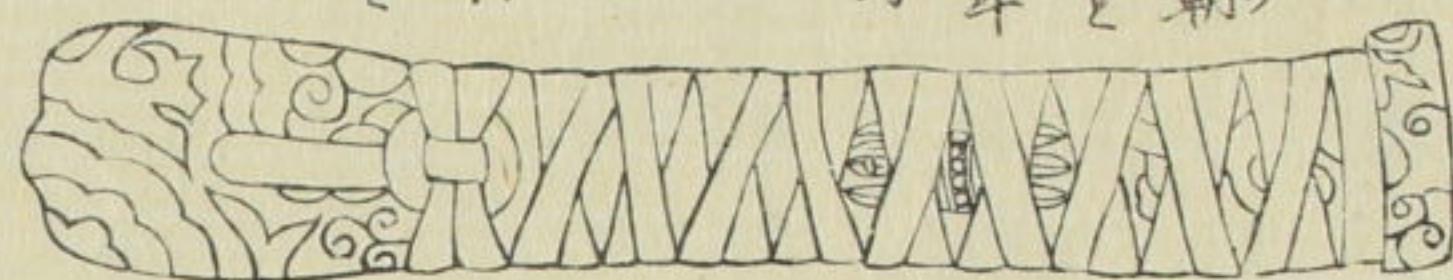
多治見四郎次郎國長を美濃國乃原氏土岐饗庭次郎光
俊源賴光乃長男次郎左郎國綱の嫡子又左郎國純乃
次男あり伯耆十郎賴兼と共に武勇世にゆふに終る
志は日野中納言資朝卿乃無禮講み招く終る錦織判
官代後改定助次郎重範等とおふく後醍醐天皇乃宣
旨を蒙り六波羅を追討し鎌倉乃北条一家を滅さん
を議りけり土岐左近將人賴春は心愛ふより日
頃乃計畧を露れく元徳元年九月十九日乃早天
小中三郎左衛門尉範行大將を承りく之を餘騎を率
て國長を宿所錦小路高倉へ押寄関をくく我を揚たり
ける國長終夜乃酒宴に沈酔く前後に知を臥たり

が時乃聲を起りて是ハ何事乃出ありとせといふハ傍
ふ臥たふ遊末んくたふ女ありけは枕ありける澄
るく打をく上常川く編さきく於寢るく海者共を起
志回より終る小笠原孫六泰長新羅三郎義光の男加賀美次郎
遠光の二男小笠原長清の孫伴野
六郎時長の孫ふて孫遊者驚りさきく太刀服をけり中門
に即朝時乃二男あり
るきり出目をさきく四方をくくと見く勢を車乃輪
乃旗一派築地乃より見へたりけり常葉駿河守範貞
乃紋に連孫六立廻り太音揚てやけるは比阿乃市企早
くも顯るく此とて六波羅より討ち乃向くく外は
其や面々太刀乃目貫乃ありんかといひ切合く討死せ
しやと呼くく腹巻取く肩を投りけ廿四指たる胡録

小鳥丸圖所載目貫

目釘乃上小三銘を
置く目釘を塞く

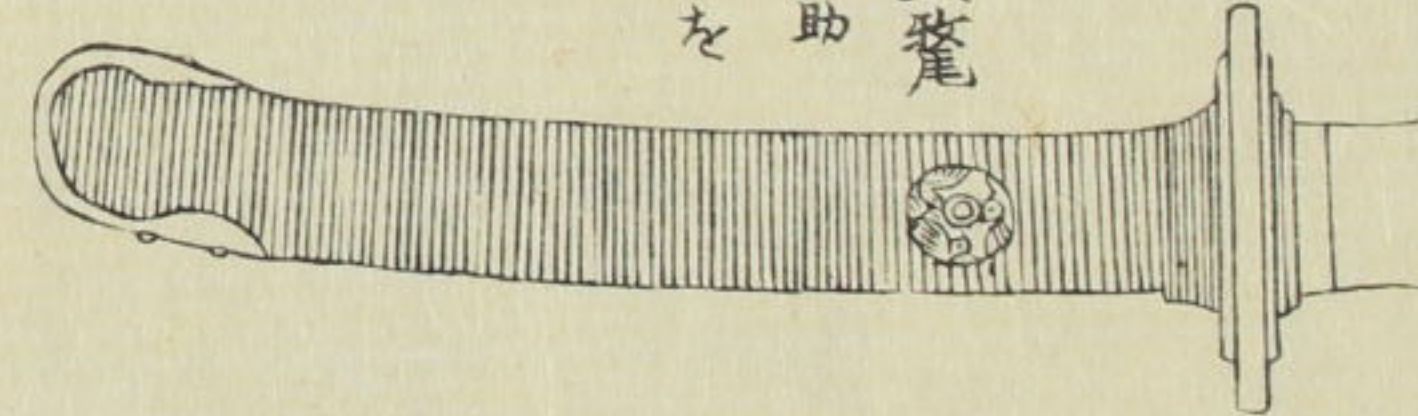
小鳥丸ハ
平貞盛朝
臣乃大と
云ハ九百年
上の表飾
と知ヘ



目貫小鳥丸

集古千種所載義朝目太刀目貫

此太刀櫛
長八寸九分五釐
茶色生糸二助
を合とるこれを
巻く



北条家所納と云

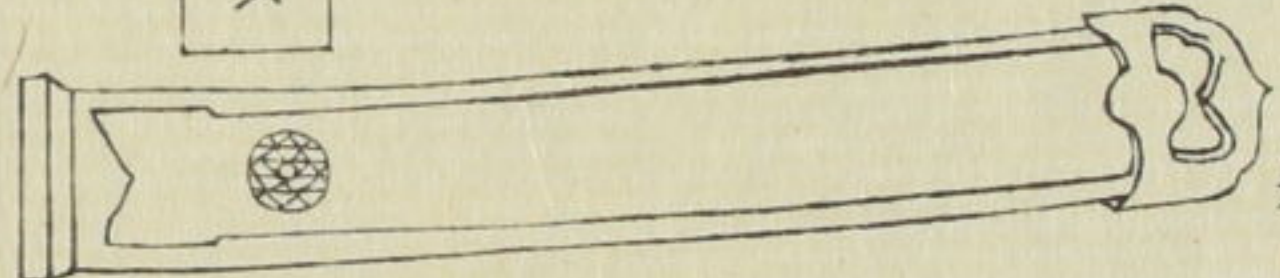
目釘三輪

目貫おろく
さうろこを巻く

目貫太刀ハ八分鳩三ノ目
目釘の表丸鉄の如く裏
面の如く一々茶草を引
とやをく

軍器考云云目貫ハ
目釘の覆ハあると知
へ小笠原孫六乃目
貫乃ありんやと云
一詞を味ふへ

伊豆國之島神社太刀目貫



俵藤太繪詞所載腹巻著背板圖

俵藤乃下ふふをの
めく見えたるハ背板の
ふとを著し胸をふ
このふとを著し



此圖ハ土佐の廣と
いへり藤太ハ
應永乃頃の
姿と知へ

廿四指乃胡録の箴竹圖

京師一故家小藏
ある箴竹をうに
やうの箴竹根を
て差しけたるやう
立涌りぬき
あり廿五箭をさ
たると見ゆ



小笠原孫六廿四人を射る後おを箭一筋を
なぐ腰ふきまといへハ廿四指と云と廿五矢
あると明らけ一軍防令り兵士の胡録一
徑箭五十矢ありを之代實録に半ふ蔵さ
てるたる強るとさハ廿五矢乃胡録の清和
天皇の御代了起ると知へ一廿五箭さうと廿
四指と云説ハ別ふ書あり

小繁後乃手を提ぐ門乃櫓へ走り上揚し後同乃板をハ父
字ヲ押ひらし中差をく打盡ひあつて一乃大勢や
我等の手柄乃程ちきふたは抄討す乃大將ハ誰と
人乃向ち終るに居らん近寄る矢一ハ後より市境にへと
ぶまふ十二束之伏我指四本を一束と云ハ十二束之伏
忘るゝと引疲るゝ切つ真先に進んだる將下
野前司々柔黨衣摺乃助房といふ者の體の去向より奔
付の板すく矢先白く射透され馬より去逆り落る音も
世ハ是を始とゞゞゞ鎧乃袖草摺胸板ともいふ人指ハ
引ハ先射けは程に面よりまゝ兵廿二人箭乃下射
落し今一筋胡録不殘すゝは矢を手にあらず胡録をハ櫓

より下へからると投捨ハ前一筋ハ冥途乃旅乃用ハ手拵
へき形りゝゝゝ腰より日本一乃剛乃者の萬衆乃君
應もも奉る自害も有板を見置る人ハも語色と高聲
と呼らるゝ太刀の鋒を以て衝く櫓より倒る飛落る貫
つて死したるなり此間ハ國長を始とゞゞ一族柔黨
廿餘人物具ひしと堅め大座より跳り出る門乃関の本
差固め入来敵を待掛たり寄子大勢なりと云とも思切
たる者共死狂ひせんと引張たる氣色を怖る内へ切
る入んとする者ゆかりけか妙々伊豆次郎父子兄弟
に人門乃扉の少破たる所より腹這に成る潜り入た
りけか志の程も去といふと待張たる敵の前へ這

くふ事か後いそ刀を打合さすくもかく門隙より討せ
あつり寄子あををく孫ちう付あもかうりけあ間かく果
あと多治見國長門乃扉を押開き討子を承くる程の人
まのさくあも見えりあをあを早く是へ入るへ我等
頭と引出物に進らと一と取しあをさくさくけあ寄手
あを子氣をばく先陣二百餘騎馬を乗放し歩立と成喚
くをへせ込入けあ揃る廿五人乃兵くも遁せしと
切たふ事かあいか一は一も引合さや大勢乃中へれ
き入面もあると切く回る先驅乃あ子又百餘人散く不切
えりも門より外へ廻と引さあとも寄子の多勢をさあ
先陣引ハ二陣りけ入二陣進出さるあハ二陣はく込入

辰刻乃辰より午刻乃辰よりさく火出敷後我ひくさとも
國長り手の者さくもひるさく追手乃軍つりけあハ依
依渡判官高氏時み廿手勢子餘騎を引けく錦小路乃
左家を打破し後より亂れ入國長あをを見く我身も數
箇所ハ負ぬ今ハ是とと大手乃門をさく固め申門
廊も並居く廿五人乃者とも差違へさくちうへを散
て臥たりけあ追子の寄手さく固めく門を打破るその
間子搦子乃者とも早首をさくさく六波羅へ引込を
時ちうり乃我ひり子負死人をかさるる二百七十三人と
そ聞えけあ國長今年に拾ハ歳といや
要と館乃形容も土と破頼魚
の亭と見合せく知へ

太平記 多治見氏
熟譜 等の意を撮

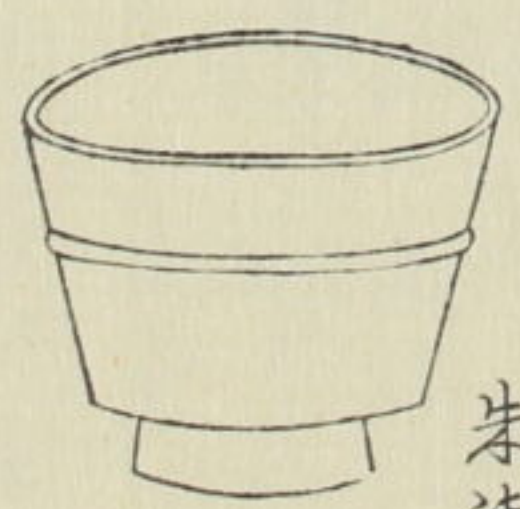
多治見國長乃錦小路高倉と太平記了あり地圖
 了就く見彰る錦小路北より高倉乃東あり今乃京
 圖より考へてハ高倉通るおひ居所の東側より錦小
 路魚屋町乃北より南郷町通るより居町乃西側と云
 るは南北へ一町東西半町乃地と別由土岐頼兼
 乃亭と東西相隔りて十町許なり但佐々木佐渡判
 官高氏乃家ハ即今乃四條道場歡喜光寺乃處あるを
 以て京極乃佐々木と称せしが中系圖より見ゆる時ハ
 多治見の家とそ乃相距一僅より三町を過さず錦小
 路乃左家を打破するに及ぶ平日其地乃形勢を
 熟考し故なるべし

古代酒杯

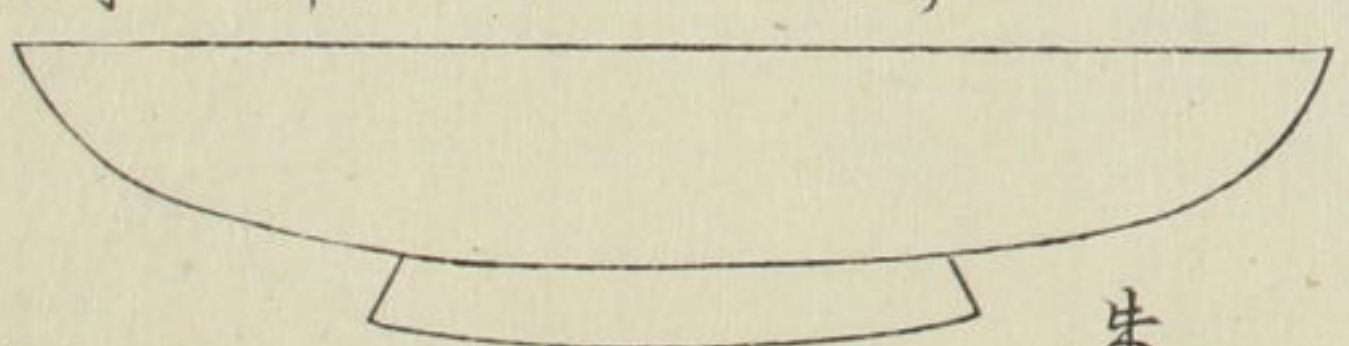
和酒より乃盃 徑五寸二分 黒ぬき



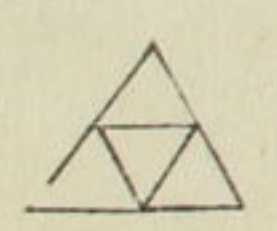
北条泰時乃酒杯 朱漆 徑二寸八分 深一寸八分 底高五分 徑一寸八分



北条 泰時 乃 盤 朱漆 徑二寸六分 深一寸四分 底高一寸九分 徑一寸二分



山城國 葛野郡 高尾寺 藏



關加井坊

又鎌倉大町慈恩寺ハ此の盃を藏せし内ハ
 檢校乃蒔繪あり黒塗なり千壽前主御代と
 酒宴に用ひしと云侍人又曰所妙本寺ふもなり

鶴岡職人盡歛合所載遊女

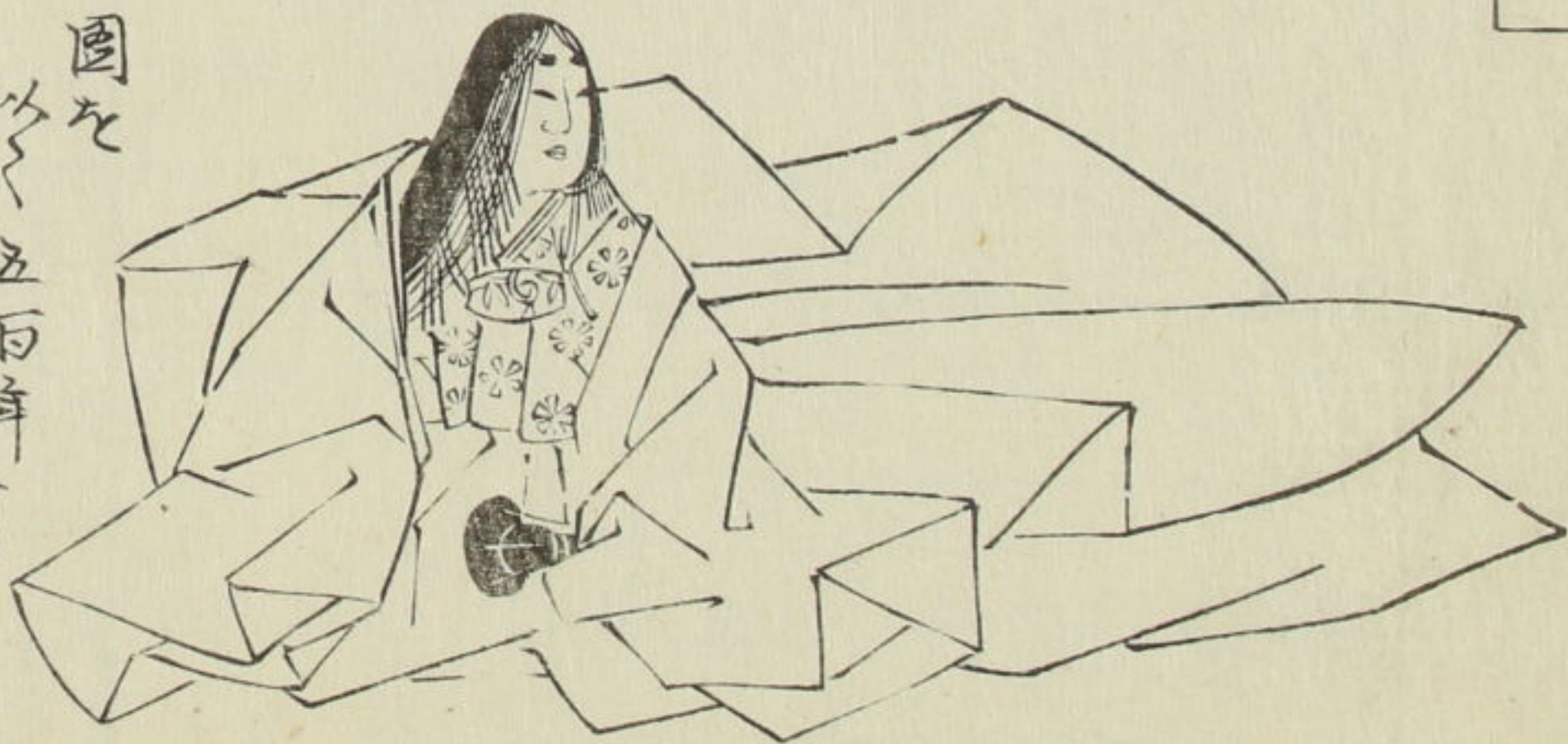
行^{ゆく}瀬^せより新^{あたら}きん月^{つき}乃^{すなは}ち
 舟^{ふね}よかれ乃^{すなは}ち彼^{あそこ}のより
 是^{こゝ}かゝたのまじきを契^{ちぎ}り
 おりひ定^{さだ}めぬ人をこゝ
 へ

土佐行廣筆江口君圖

應永のそめの体と



以二圖を
以て五百年
遊女乃侍を
前の



四ノ下

依古圖所考定土岐多治見宿所并六波羅亭方位圖

後醍醐天皇の
皇居ハ冷泉萬里小路
の内裏とあり

ルいせい
冷泉ハ今来ハ此川と
云即今ヲ折馬場の
五丁目の東大炊丁
きや町の地あるや

六彼羅ろくはらい今の
六彼羅ろくはらの
松余まつあま通とほうのとほ勤きん
ふ北きた街まち門かど町まち乃なり名な
ああう北きた方かたの門かどああう
たる地ちかかるるい
西さい街まち門かど町まち小こお
ひく六彼羅ろくはら乃なり
諸しよ乃なり乃なり乃なり乃なり
名なああるるい

源川

三	水
四	水
五	水
六	水
七	水
八	水
九	水
十	水
十一	水
十二	水
十三	水
十四	水
十五	水
十六	水
十七	水
十八	水
十九	水
二十	水
二十一	水
二十二	水
二十三	水
二十四	水
二十五	水
二十六	水
二十七	水
二十八	水
二十九	水
三十	水
三十一	水
三十二	水
三十三	水
三十四	水
三十五	水
三十六	水
三十七	水
三十八	水
三十九	水
四十	水
四十一	水
四十二	水
四十三	水
四十四	水
四十五	水
四十六	水
四十七	水
四十八	水
四十九	水
五十	水
五十一	水
五十二	水
五十三	水
五十四	水
五十五	水
五十六	水
五十七	水
五十八	水
五十九	水
六十	水
六十一	水
六十二	水
六十三	水
六十四	水
六十五	水
六十六	水
六十七	水
六十八	水
六十九	水
七十	水
七十一	水
七十二	水
七十三	水
七十四	水
七十五	水
七十六	水
七十七	水
七十八	水
七十九	水
八十	水
八十一	水
八十二	水
八十三	水
八十四	水
八十五	水
八十六	水
八十七	水
八十八	水
八十九	水
九十	水
九十一	水
九十二	水
九十三	水
九十四	水
九十五	水
九十六	水
九十七	水
九十八	水
九十九	水
一百	水

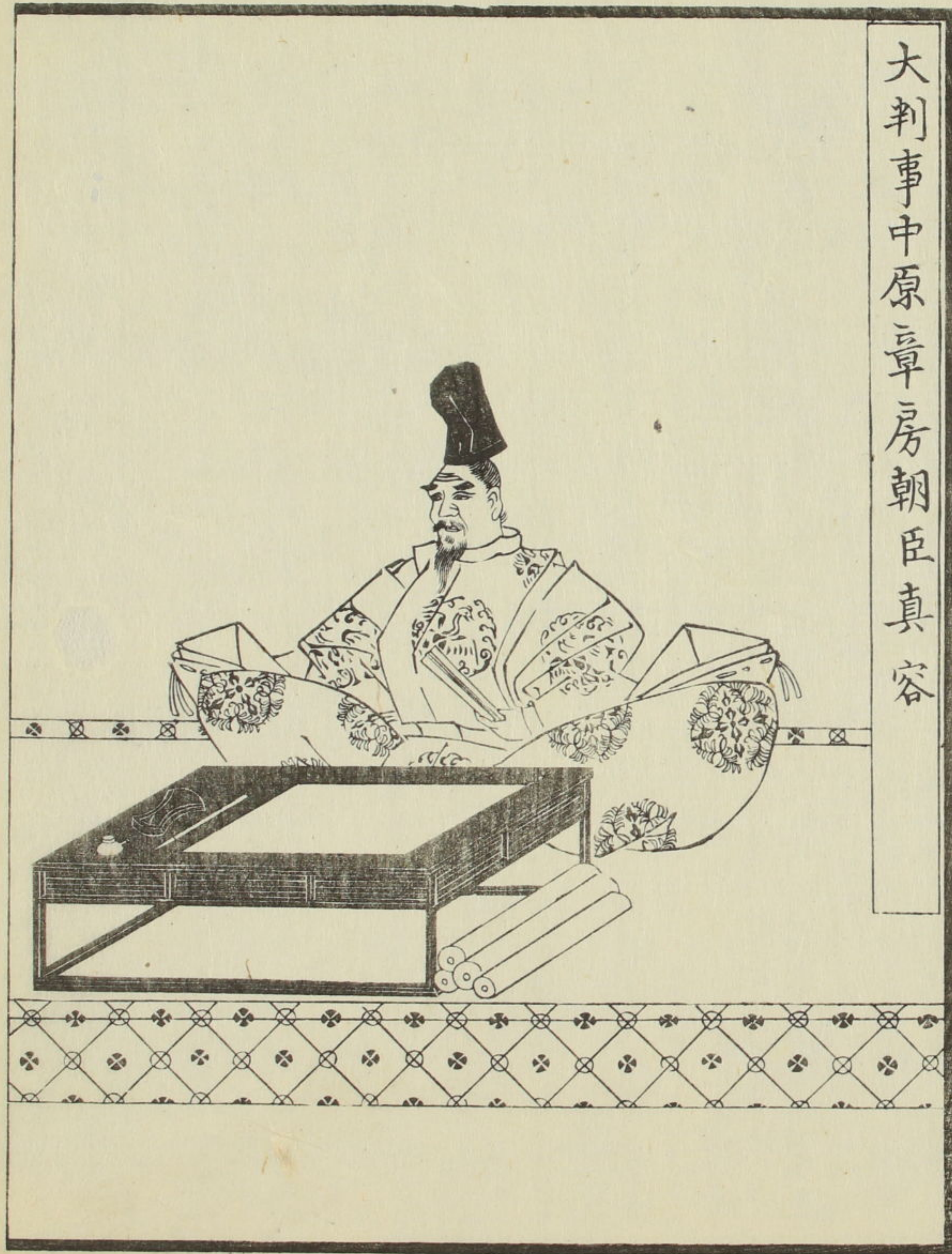
富小路
万里小路
高倉
東洞院
鳥丸
空町
町口
西洞院
油小路

建仁寺

六波羅寺

多治見國長乃遊君を傍に臥し先終夜酒宴せしと云
 を訝る人あり是等今考へる尊卑分脈圖に本曾義仲母
 遊女鎮西八郎為朝母江口遊女悪源太義平母橋本遊
 女蒲冠者範頼母遠江國池田宿遊女等あり數外あり
 平治物語に義濃國青墓長者大炊娘延壽を分脈圖に
 ハ遭墓遊女と記を東鑑に大炊内記大夫行遠女
 と記を六条判官為義丸馬頭義朝等乃猛將猶遊女
 會々子男を生しめあを譜牒に録し醜しとせ
 ありは終に怪しむる思ふ然と云内行正一か
 らも宜かるが中興恢復乃大業を見るに及ん
 其身を殺し其家を破るしと

大判事中原章房朝臣真容



正に位下行大判事中原章房朝臣ハ後宇多後伏見後二
条花園四代乃舊臣と云を以て後醍醐天皇殘祚乃初
居んとあさるおろしやう時先う一終ひたり

職負令ふ 刑部省大判事二人掌案覆 紫ハ獄訟の論定
又え覆とい議うふ察さる 鞠状を説文に罪人を窮理と
を云と彫れに住るにゆ 鞠状を説文に罪人を窮理と
口書のぬき 断定刑名判諸争訟と見え官位令る大判
事正五位下とり職原抄ハ明法道輩とせし任と
あるや新明法博士たふを世職とせしる 同抄尊
卑分脈圖ハ中原朝臣本姓十市宿祢と云天延二年十
二月日宿祢を改め朝臣乃姓を初ハ安寧天皇第三
皇子磯城津彦命の後也と云系圖ハ太宰少貳藤良の

子ハ少外記春宗あり春宗の子ハ少外記有寂初ハ中原
朝臣乃姓を賜ふと云と子ハ大外記致時從五位上
伊勢守たりと子ハ師任大外記從五位上天文密奏たり
師任ハ子あり長子俊平遠江守次男師平大外記助
教天文密奏大炊助肥後守たり 之男貞親大
外記正五位下たり貞親ハ代乃孫ハ明法博士章弘と
云あり即章房朝臣乃祖あり

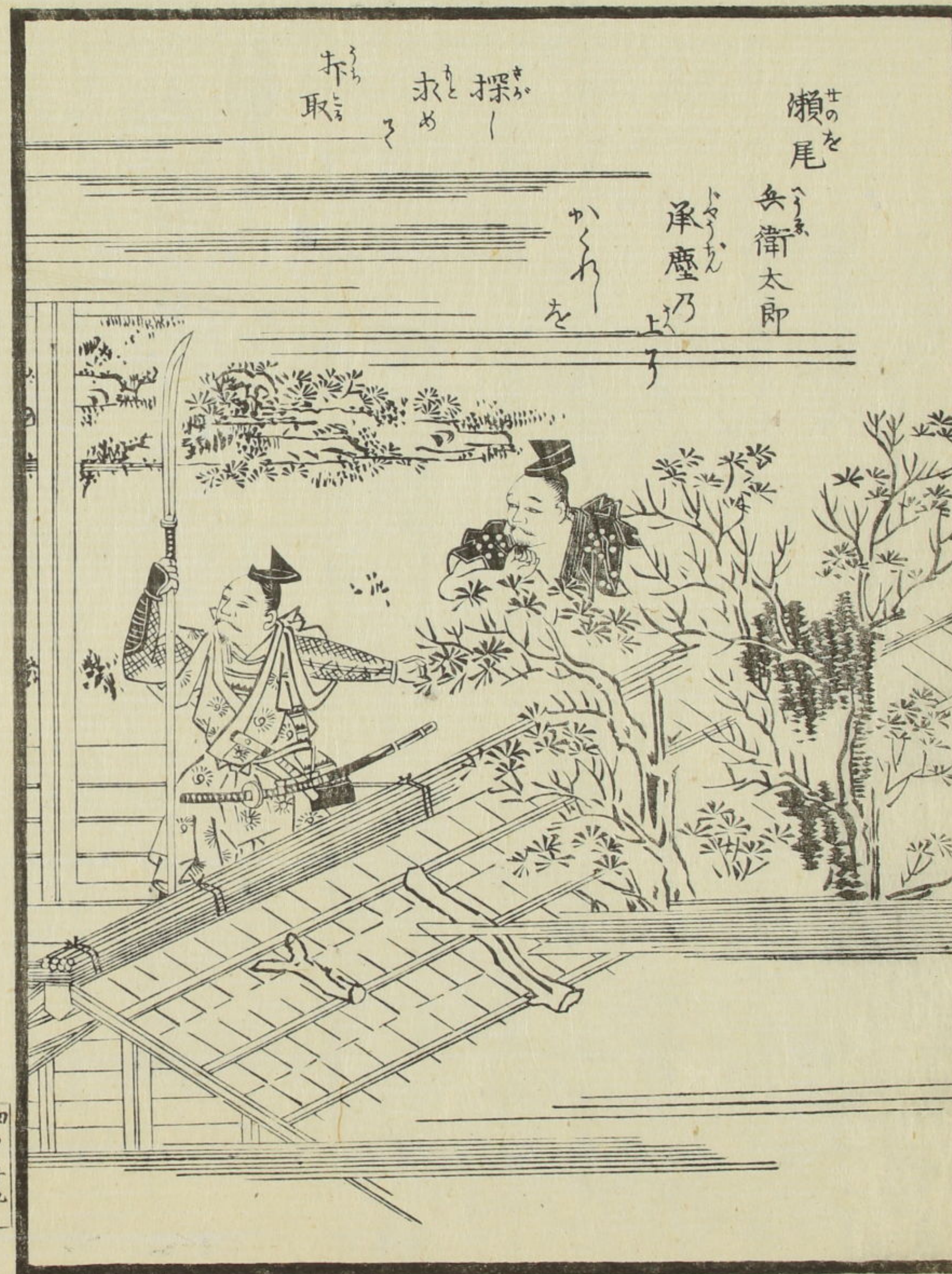
天皇鎌倉乃高時と云はく敬慮ハ違ハ奉ることを愠ら勢
玉ハ色を追討あるへし由あり中納言資朝卿衣以辨
後基朝臣等ハ作合せし色國ハ乃武士ハ論旨を下さしける
と如何ありと漏たりと鎌倉の高時入道と云を以て

大不驚を多し資朝卿後基朝臣を鎌倉へ呼下し入道の
心乃より遠き島に遷しおとしけしは天皇より逆鱗
すし海に連る兵士をめさせし鎌倉を征伐あるを
近侍乃諸臣に仰あつけんとし章房朝臣ハ法家乃古老
と云を以ておとしく勅定けりけりし章房朝臣謹く奏
聞せらむけるや高時入道乃勸慮し逆ハ宜旨を戻し
一朝夕一夕乃に以て鎌倉を滅ぼさるる思食され
しと云遠く承久乃合戦近くは正應乃蹤跡を以て考
見し後鳥羽院の義時を討んと思食されしハ仁科盛遠
鎌倉を棄て京上し院中にお仕えしハ義時盛遠
所領を没収せしと龜菊女子播津國長に食糧二莊を

給たりしと地頭龜菊を慢しと領家とせしハ龜菊
憤りしと院に地頭を改補せんことを訴へしを義時
仰下されけり義時地頭乃罪科せしめしと云し
改さるるを深く逆鱗すし海に連る兵士をめさせし
正路ありしと院に龜菊と後宇多院乃鎌倉を
討滅し六波羅を誅伐しけりし思食されしと云し
院乃皇親相續せしを給しとの勸思ありしと云し
唐虞乃相讓り大王の心を推し遠く慮りし給り
しと云し貞時より高時入道
に世々後驕慢ありし民望し背けりしと云し義時泰時時
頼時宗貞時等恩を頼り顧みしと思人老幼多くしハ云

朝家乃卿相雲客を心乃後子貶謫一皇天乃震怒を怖
を振舞ひか也今宜旨ふ依く旗をけ陣頭了馳来らん
武士多くハ己方非分乃訴訟了負く鎌倉乃奉引頭人子
怨を令むとのあらとけ諸寺諸公乃之綱專當公人かと云
を乃あゝか海一ひかふと仕出く却く公乃山愠と不里を累
ぬる事もやいせんきりん能く聖慮を回さく楚忽乃後悔
かうんをを籌り玉へと諫奉里一忠言獻慮了應を以
加之事乃他了漏たらん乃御大事了及ふ面一と深く驚
き思食て平宰相成輔卿了竊に章房朝臣を失ふへき計を
運らさくけるを憂悒々れくともあゝ以章房朝臣ハ宿願
乃賽一ふくく四月朔日洛東清水寺の觀世音へ糸指せ

志ふすく閑残る花乃梢に樹々乃新葉乃淺碧春乃名残
も流石あゝ我まやハこと逍遙一ハ乃延暦の十五年三
月乃末了坂上田村麿強延鎮了渡河了浮人老乃令
色を尋ね登りく作りく千手乃御影を隨喜く我家
を捨く伽藍く清水寺と名付くより代ハ四十を
あま一歳乃五百小二十餘年を過き一靈場ふく一烟臺
隔路三子粂花柳藏城十二衢了新撰朗詠乃迎春詩を吟
太下向乃道了き一乃西大門を出入るを折節吹くる
松風了つとく村雨一あゝ降るをけきハ章房朝臣
西大門ハ雨宿く遙に男ハ八幡宮を拜く何んか
首を傾け居たりける後より誰とはあらと暮々不佩刀



いふされとも見えさうけしハ今ハ是れぞいさ返らんとも
お仰さくも此ハ承塵のふり人乃衣服をうふ見えさう怪し
何者ぞとく長刀乃柄をうりのへあをいへく突きさうふ刀
を抜くも落お川道ハ章信う後者おうもたくと股を
あうふ斬さうもく臥さう刀をわう猶もたうふこれを
これハ兵衛を即あり章信喜て其首をうり其家を打破り
て弟乃郷房を生捕て兄章兼り斬きんも先う追えさう
を即う首を車乃前ふ置く立還るを路乃ゆさうるもの至孝
乃深志を諸天善神感應あう鬼神乃て呼きたる瀬尾
兄弟をやく容易く打ちうりてよとく敵を揚ぐる譽たう
けか東寺執事日記異
秘太平記みよる

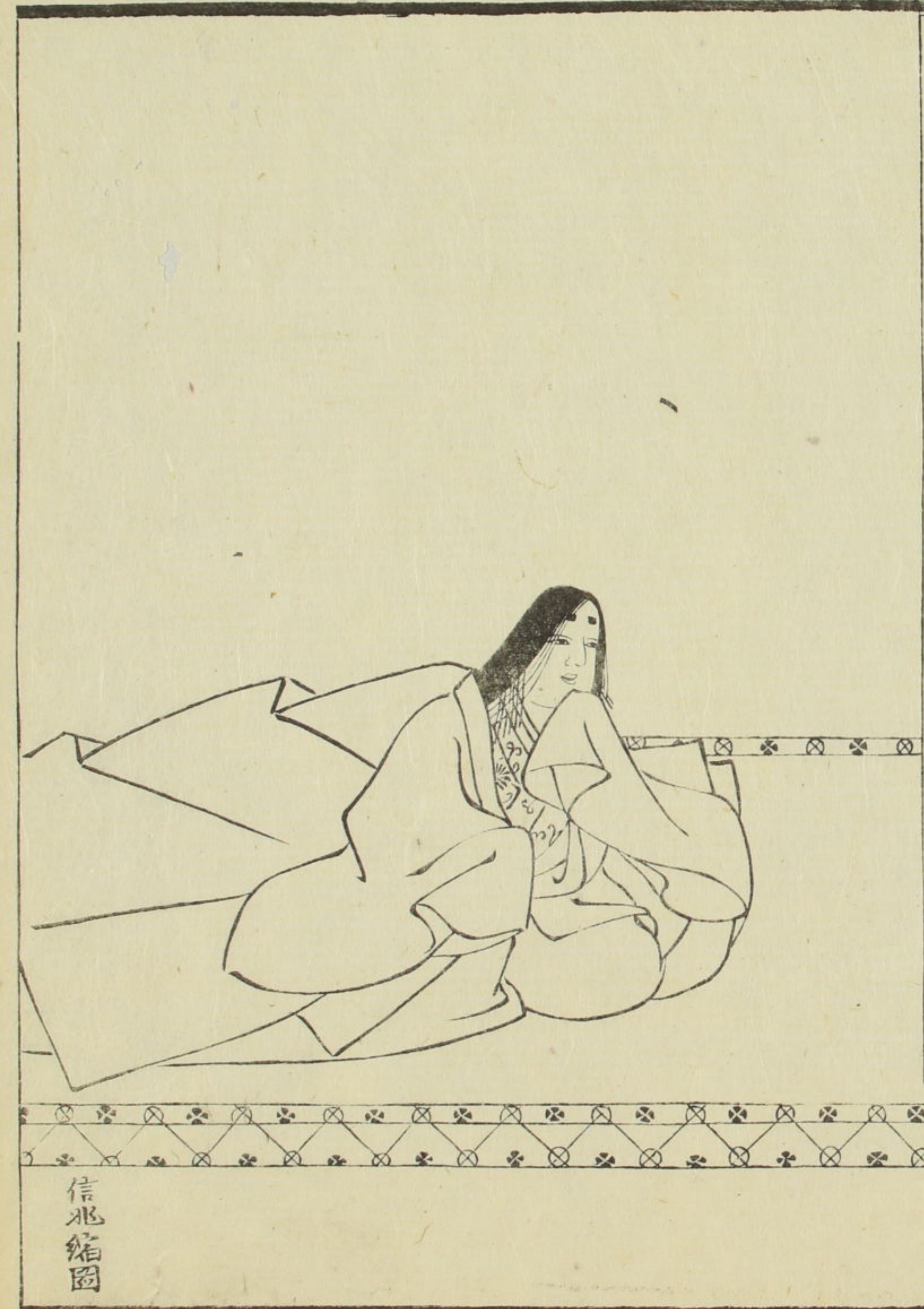
宋朱晦菴先生戊午讜議乃序小君臣父子乃大倫天乃
經地乃義あう所謂民彝なり故う臣の君ふ放る子の父
み放る生則あふ教事一死則あを哀送を其忠孝乃
戒を致す所以うもの極を用ひさか所か虚を加ふる
母非さかく乃あうささハ以て心を盡さうとあさのこ
然則乃君父不幸あう横逆乃故う罹るさう臣子
たうもの痛憤悲疾さうあさう為ふ必その讎を報さうと
を為んと求る者其志豈窮より有んや國家宋朝を清康
の禍欽宗靖康元年徽宗欽宗乃二帝二帝北狩さう還る
臣乃痛憤悲疾さう知萬世といふとも必その仇を報さ
へさうあうと云ふは議あふ道さあうさう朱子これ

を言んや承久乃亂と後鳥羽上皇乃私暱偏愛よりと
起るといふとも別ふたふとの二上皇の海島に遷幸成る
遂に還るを給ふ人永く靈柩を荒服乃地に安置し奉る
ふ思ひんや凶暴女媧の義時かを辰を以て君を遷す
かゝるを以て故に幼冲乃後堀河院を立て天皇と
皇命を以て二上皇を放黜し天皇ハ幼弱ふよりゆゑ事情
を解らと給ふ人とも播磨攝政家實光明峯寺攝政道家
等の諸大臣を束縛し制を武士に受く恥し給ふ
去り如く君臣乃大倫廢し講を以痛憤悲疾乃意忘
たふり如く哀か後堀河院四條院二代廿餘年あり
て皇統より後鳥羽院乃皇胤を復しむいふとも承

久乃讎を報る我處より思ひゆるを給ふ人却て
食の所置を徳とあさとりけふ怪しき正應の密
旨に皇統を我御流し傳へり人々私情を指し承久の
讎を復せらるを以て兵を興と名とありて去る家實
共々正しき民乃耳目新たし軍かからし睦應よりけし
章房朝臣五代の名望ふし刑名法律ハその家學と
し其乃諫疏たふ兵乃強弱を論じ我の直し児童の見
乃て天皇より旨に逆ふを以て廷尉に付し鉄鉞乃嚴刑
に處せらるる章兼章依讎とせし如く瀬尾兄弟身を
傷あふり至るに然るを平宰相論し貨を以て人を
殺しめその踪跡を問ふ人といふ刑を失へりといふ章

兼章信不幸ふく慈父を横害をらるゝといへとも數月を
 出でたふその難を獲て去るを甘心するふ至る神助ある
 かぬ或云河津祐泰を射たふ近江八幡が流とも祐
 成時致あを置く祐恒を難とい今章房朝臣を殺し
 たふ者ハ瀬尾兄弟あふともあを殺さぬと成補郷
 なり章兼章信いこの形也ハ瀬尾兄弟を難とあゝ是を
 殺し平成補郷を仇とあさおや余あを殺しといふ
 初そ乃仇をうらさるゝふ漸く瀬尾兄弟たふをいし是
 を討くさる成補郷をいし次る天皇乃密旨を出た
 をいふ然まとも天皇ハ仇とあさへい故る瀬尾を仇
 といふ子骨う膝とると萬くと云へまなり

土岐左近藏人頼春妻齋藤氏真影



土岐元近藏人賴春妻齋藤氏ハ齋藤太郎左衛門尉藤原
利行乃女也利行ハ大織冠無足公の曾孫河邊元大尉魚若
乃孫左衛門尉賴春從弟也利行乃女也利行ハ大織冠無足公の曾孫河邊元大尉魚若
乃孫左衛門尉賴春從弟也土岐伯耆十郎賴兼
勸ふより日野中納言資朝卿乃催さるけふ夢に講みか
るに屢々會したるけふ其身清和源氏乃嫡流と
久しく平氏乃下屬するを慷慨けりより遂に賴兼と
共ニ後醍醐天皇乃思食たり終けふ北條高時一族追討
乃密謀るもめから必一方乃大將と憑きけり終に
賴春齋藤氏を迎えく互乃志深く思愛乃情篤り里け
ハ其身官軍乃徴せく合戦乃場ニ赴むは千の一に
討死せしといふとあるやと思へハ兼く餘波のありしや

頃々長月秋乃夜の長き寢覺の物語は一樹乃陰に宿る
おあ流を汲も皆是多生の縁浅く況相別て既る三
年不餘里等閑からぬ志乃程を氣色了のけおふれ
も知終へらん去あくも定めかき人同乃からハ無常浮世
乃理あう今晨我身より形く形くぬときくや人といふ
貞女乃心を失ふく我後乃世を同く人同不生をゆえ
再ハま釋の契を結ハ漸く不生の同一蓮乃臺に半坐
と分り侍へると其より形く洞あふふかき口説たれハ女
ハくしと聞て怪しや何この侍を明日を乃契乃程も知
ぬ終る後世より乃葉皆の忘んく情ふあふく人らめ
やうくハ何ふことを宣ふと云ふも是れと云ふ

恨ひふふふ同く是ハ男ハ心浅く去いと我ハ慮テ勅命を
蒙リ我ハ憑きこまる間辞を致し道あり官軍ハ與
ぬるふ軍ハあり一生く二夜我家ヲ悔ふと思
ふ此は是ハ近ハ別乃ハありさふか援よりあり宛ハ人
ハ漏り勢ありか能くはを堅めて同床あり臥たり
女ハありあり明也ハ風ハ起歩くけり事ハ援を思
ふ我ハ乃御事成さく武家勝をばたらんふ我ハ
忽チ誅せられぬ一武家軍ヲ利を失ふハ官軍勝ハ
のらり父兄をさめた是ハ一人生残るふいづやける
を我父ヲ語る夫を回る者の者とか男を助け親類を
救ふやとおもひ急ぎ父ヲ許しゆき見ハやふけをつけ

々也ハ齋藤利行大ニ驚き居る頼春を呼寄る石
思議を承る今乃世ハや乃事おの企たははんハ偏
石を抱く淵より薪を負く焼くを過る乃壁あり他
人乃はより漏るハ我等ふ至るす皆誅せらるへき
此ハ利行ハさく六波羅殿へ参る御邊の告知せたる由
をさく其咎を遁せ申さハやと存するいふと聞かれ
ハ是程乃一大事と女ハ知る程のふありあハ仰天を
さるへき色を失ふ恐怖この事ハ同名頼兼多治見
國長ハ勸り依り固意仕んたく鬼ハ角ハ身ハ終を助る
様ハ御計ハいとやきふより未明ハ利行ハさく六波羅へ
参る事の子細を委しけり即時ハ鎌倉へ早馬をたぐ

一遍上人繪詞所載女房装束

土岐頼春の妻
父の許へゆ
は等の繪
考へ



は繪ハ大依元弘建武
のころ乃作とるへ
笠ハ市女笠あり
たきものハ板金剛と見也
は五人ハ大うく中人乃妻
とらる

倭後太繪詞所載女房装束

およ竹物語繪女房装束

此女房のやつまハ油ひろ
官位ある人の妻おれハある
へ



はさきものハ横柳乃裏ふ
おろけ固もや應永前の京
の風俗とるへ

これハ賤し人の妻と見也

も京中乃武士を召集く土岐多治見の宿所へ討手を差向
らむふ土岐も多治見の能軍くく潔く討死くく終る頼
春は回るく命をうけ生たきとゆ六波羅あくゆさう賞
かう々々い美濃國く下向く席田郡船木ふ乃蕭あけけ
館く引籠てて居るける

船木ふ乃席田郡本田村の北ふあり席田郡乃東郷乃ふ
ちの後拾遺集ふ紅葉の色浅くと云ふを今上白河院
給ふはあくふありとへ呈ける右大辨通後

いふふ船木乃ふの紅葉は乃秋はきくと云ふと云ふと云ふ
新勅撰集ふ権中納言經忠卿

ありふく船木乃ふの紅葉は乃晴雨乃雨くいろそあかき

かとうくくは新所あきありたり船木館ハ頼春の祖
父隠岐守光定乃別業ふくく子隠岐孫次郎頼重
御替守頼重の弟ありと云ふに衛門下人ふ補くく傳くく終
後後五任下り叙くく右近衛監子任さるるくく
小頼春く及人頼春ふ字ハ孫三郎左近衛く補く藏人
ふあきと云ふのちく左近衛将監子任く建武二年九月十七
日等持院將軍家乃ふふ新田義貞朝臣以下乃凶
徒を誅くく御教書くく錦乃袴を賜くく
と云くく早ふ船木固く見くく後く出家くく法名
普蓮くく子男頼夏と云
齋藤氏もまといきくは處くく任けるふくく天下盡く
官軍ふ属く六波羅ゆ鎌倉ゆ亡く父兄も皆討死くく

同く世をもち思ひ絶へ美江寺と云ふ寺に尼とあり
 文和二年七月七日誕生を遂げるといふや弘安四年
 元徳元年

春秋傳ふ鄭祭仲の女ハ雍糾の妻あり雍糾君命ふ依
 る祭仲を殺さんとせしを妻あるを知らず父の告ぐ
 夫を殺さしめける時謀婦人及へ里宣あるか其死
 しく云里頼春を雍糾の似く女を氏を祭仲の娘に
 似く里を頼春とめい愛着ふ執しく身を失ふと
 せうか後々誅戮を怖し約を愛するを傷す
 但五十年の露命乃た欠く子載多窮乃臭名を存せ
 痛惜せらるる人

大衆院尊圓法親王真影



大衆院宮二品尊圓法親王ハ伏見院弟又皇子永仁六年
戊戌歲誕生し海峽に尊養寺蓮院意道法親王乃
御弟子とあり勢終ハ青蓮院ハ天台座主弟四十八推僧
快法親王意法和尚良尊法印良快大僧正慈源大僧正道
覺法親王最守大僧正首助法親王慈禪大僧正道玄准后
慈実大僧正慈助法親王慈玄大僧正良助法親王元弘元
年十月廿八日天台座主了任を了り於妙法院尊澄法親王
ありし九月並置傳教大師乃弟弟子義真和尚より弟
入所ありし國なり
百廿一代乃貫首ふて三塔渴仰乃首を傾けし隨ひより
けり心慶二年上表ありしかば梨下乃多ふ尊胤法親
王居りて天台座主了任せりてし下祥堂の沙汰し及ハ
せり此二月十二日隱遁しより
百廿二代乃座主
宣任とすへきり

六月妙法院尊澄法親王讚岐國より上洛ありて山務每事
元弘元年乃儀了相違ありけり
をらと再任乃儀を用ひりてしより
家より推舉しよりしより百廿一代乃歷位を除のを移し
ぬは後延元元年後醍醐天皇芳野ハ一潜幸ありしハ
澄法親王乃遠江國を志しし湖水了船を浮へしハ
を遷居しし時乃後又梨下乃尊胤法親王延元元年十
月より曆應元年十二月迄ハ山務心慶二年乃儀了りて
北朝より宣旨あり曆應元年十二月より同二年ハ大御堂大
僧正聖惠和尚ハ天台座主了任を了りて後嵯峨院乃
所孫前征夷大將軍惟康親王の三男曆應二年十月廿六
天台座主櫻嚴院僧正親源乃弟子也
日還補乃宣旨ありて同四年十二月迄ハ山務を執りて
ありし
式際ふりハ百廿六代乃歷位とすハ百廿七代祐助法
百廿代尊胤法親王又觀應元年七月廿日還補乃宣旨有る
王と相續あり

月山門より東宮皇子恒良親王一宮尊良親王三隨
ひまの新田義貞朝臣と共々北國へ下向ありて同二
年二月六日越前國金崎乃城に於て一宮御自害あり
ける御供より房朝臣もおあゝく自殺しあひたり
より弟乃房卿弟十二代を相承せらるゝなり尊國
法親王乃房卿乃に傳を相承ありいと云は入木
道第十三代相承と稱しなり金一宮青蓮院御室
入木道相承ありて澄觴あり

尊國法親王御書を賞覧せしに尺素傳來より近日名和
字漢字共に青蓮院尊國法親王御筆為親模而都鄙既之
とあふあり知らるゝなり貞和二年花園院風雅和歌集に撰

ありしに清書ハ尊國法親王なり花園院ハ法親王同二
年北畠玄慧法印後三年合戰記序書たりしに尊國法親
王清書かき終へ本今に傳へるは玄慧法印述作なり
庭訓往來尊國法親王清書の本幕刻數部世に現存は歌
工人著く和歌なり其他枚舉に違あり

御歌風雅集より百首歌なり一時入る二品親王尊國
法親王のいろ色は雪とのゑある乃山風ふりくもあかん
里時多と人事を

吳行乃より乃里の郭公君より二代乃とてらか年
秋乃秋なり一時
かくあやみ歌集よりなりわく公乃室の戸なきは月歌

足慶贈法印慈應和尚乃謚号を中絶するもみ侍ける

谷川乃水乃ふくみ代々を傳へ今その名を流るる

百首歌あり一時

百補やみきり乃作のりくもひ起る祈るも我表のため

天台座よりく侍りける時日吉祭乃日祿宣国長々許り

かき乃らるるを送るも命りけしは

久堅乃ある日吉乃神祭月乃らるるも老るるもあふ

新千載和歌集より貞和二年百首歌あり一時

去りし浦や濱松のえは春乃色をえりふりめく立を膝のか

初春乃をうら莖原いけのふみ秋より高のむすひみらん

羈旅より中より

あふ流けよからとぬ床乃たひ孫お教へ似る海月ハすめとち

前大僧正義経乃おかけかくりき世乃民におりいけと侍る歌を

くみふまき大日経乃品々を伝侍ける歌中より布字品と

なへく世乃哀の標よりまじれ胸乃うちねあふ乃あふ

建武二年内裏より人々題をさるる百首歌つらうつける

時春歌乃歌あり

日らあふあふのえは春歌ハ法乃をへりあふ入る無

述懐乃歌

くもりくとみくふ乃玉のえは歌ふれく世をい乃あふ

貞和二年百首歌あり一時

表の代よりあふ乃表乃年よりくあふもあふもあふの行殺

秋田

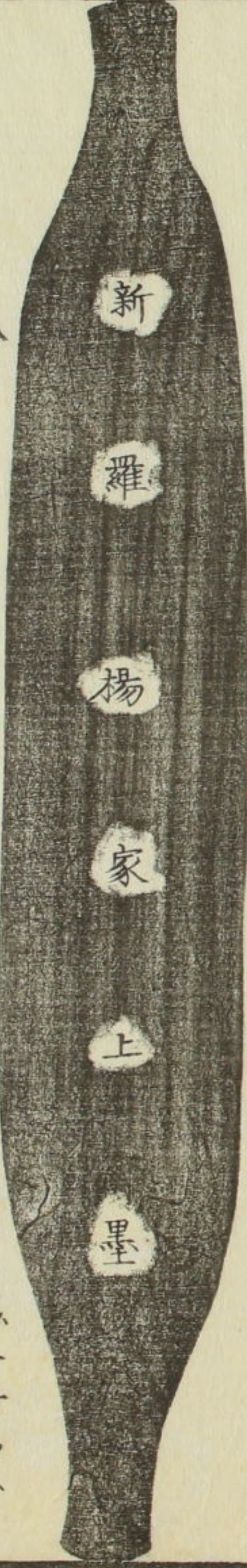
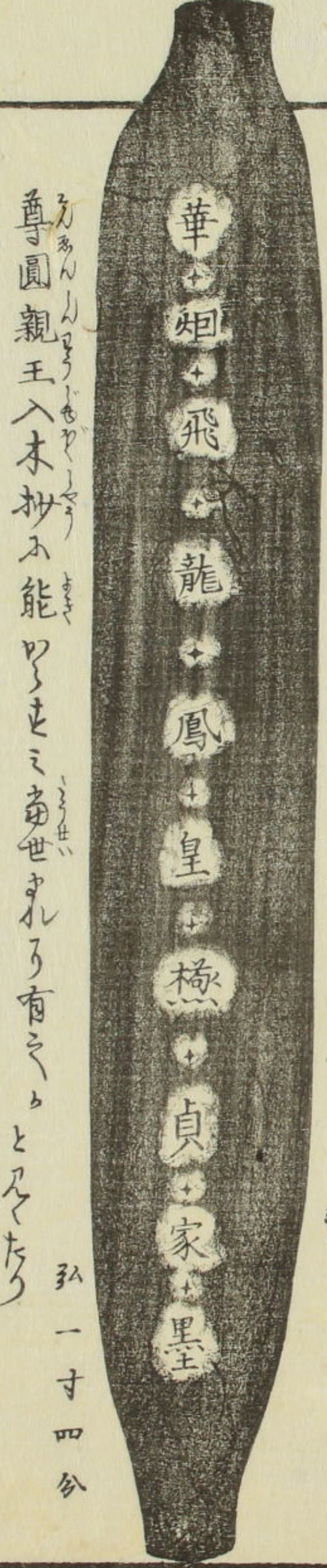
月々々々々々
志ひのつ田の

るわすそくふりかえん
のあきこるうき 尊圓

韓墨

天平年中物

九寸三分五釐



魚子をわすこといは形ふ似たきあり

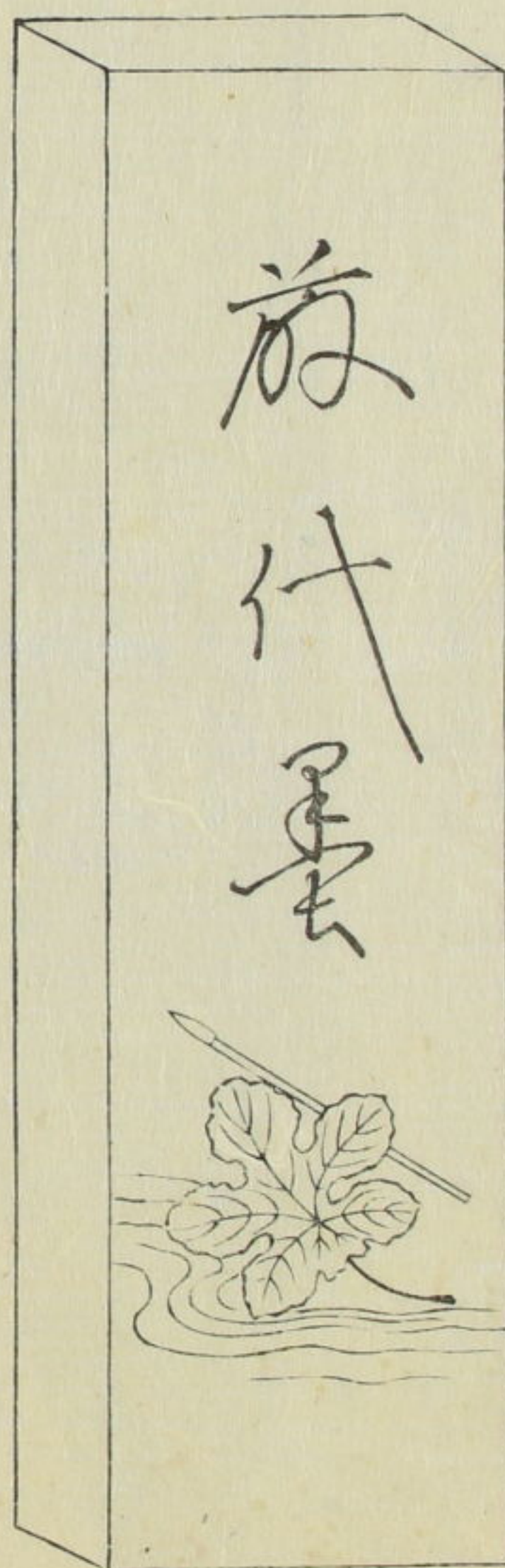
後代墨

入木抄不流稽古了多紀別後

代墨相違あるへくはく見也

總金箔 花山院家藏

大如
圖



先進補像玉不雜誌卷第四終

